

Epiphanius' biographical descriptions of Origen in Panarion 64

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 出村, みや子 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24649

エピファニオスのオリゲネス批判

——『バナリオン』64の伝記的記述の検討を中心に——

出村 みや子

序 論

オリゲネス（185頃-254頃）は多くの聖書注解やホミリアを生み出し、『ヘクサプラ』を編纂したことによって砂漠の修道士たち、アタナシオス、カッパドキアの三教父、アウグスティヌスなど後代のキリスト教神学の伝統、特に聖書神学に多大な影響を与えた聖書学者であるにもかかわらず¹、これまで教会史のなかで様々な批判にさらされ、長い間正当な評価を受けずにいた。それは四世紀以降にオリゲネス神学の正統性を巡る論争（いわゆるオリゲネス論争）が生じ、六世紀には異端とみなされたためである。それによって彼の著作の多くが失われるというキリスト教史における非常に不幸な結果が生じた。ユスティニアヌス帝は543年の「メナス宛て書簡」において「オリゲネスに対する十箇条の異端宣告文」をもってオリゲネスとその教説を断罪し、そ

¹ オリゲネスが聖書解釈史のみならず、砂漠の修道士たちの禁欲主義的修行やその後の修道神学に大きな影響を及ぼしたことについて、荒井献・出村みや子・出村彰『総説 キリスト教史Ⅰ 原始・古代・中世篇』日本キリスト教刊、2007年、98、122-125、135-141頁、関川泰寛『アタナシオス神学の研究』教文館、2006年、202-232、326-334頁、S. Rubenson, *The Letters of St. Anthony. Origenist Theology, Monastic Tradition and the Making of a Saint*, Lund: Lund University Press, 1990、およびS. Rubenson 'Origen in the Egyptian Monastic Tradition of the fourth century', *Origeniana Septima*, Leuven, 1999, pp. 310-337を参照。

の後 553 年の公会議の直前に「オリゲネスに対する十五箇条の異端宣告文」をもってオリゲネスに異端宣告を下した²。

この論文が取り上げるエピファニオス (315-403 年) の『パナリオン (葉籠)』は、キリスト教内外の異端的思想を網羅的に記した反駁のリストであり、374-377 年に執筆されている。ジョン・デショウによるオリゲネス主義に関する包括的な研究『初期キリスト教における教義と神秘主義——キュプロスのエピファニオスとオリゲネスの遺産』によれば、『パナリオン』64 は三世紀から六世紀までにオリゲネスに対して提示された批判のうちでも決定的に重要なテキストである³。オリゲネスについてはここ数十年の間にその再評価が急速になされ、オリゲネス神学のテキストの校訂版や研究が数多く出され、国際学会も四年毎に開催されている。

この研究では、オリゲネスに対して六世紀に異端宣告が下されるまでの複雑な歴史的経緯を解明するに当たり、オリゲネス批判に決定的な役割を果たしたエピファニオスの『パナリオン』64 の構成と記述内容に着目して、聖書解釈のみならず禁欲主義者の神学者としても尊敬され、後代の修道的聖書解釈に重要な影響を及ぼしたオリゲネスが一転して危険な異端とみなされるようになった一要因について検討したい。

² ユスティニアス帝がオリゲネスに対して下した異端宣告文の邦訳が、小高毅編『原典 古代キリスト教思想史 2 ギリシア教父』、教文館、2000 年、433-438 頁に収録されている。

³ Jon F. Dechow, *Dogma and Mysticism in Early Christianity — Epiphanius of Cyprus and the Legacy of Origen*, Mercer University Press, 1988.

1) キュプロスのエピファニオスとオリゲネスの遺産

オリゲネスの異端宣告が彼の死後かなりの期間が経過してからなされたのは、これがオリゲネス自身の神学の問題というよりは、その後彼の神学が後の砂漠の修道士たちに与えた影響が新たな問題を引き起こし、それにアリウス論争をはじめとして数々の神学論争の問題も加わって、いわゆるオリゲネス論争と複雑に絡み合って彼に対する批判が展開されていったためである。オリゲネスがこうした不幸な評価を受けるに至った歴史的経緯については、当時のアレクサンドリア教会の再編成に伴う当時のアレクサンドリア主教デメトリオス（189-231/2年）との長年の確執⁴や、当時のキリスト教会におけるパウロ受容の問題などの存在があったことが直接の要因とみられるが⁵、広義には当時の教会が直面していたグノーシス主義的異端の脅威や、その後エジプトで急速な広がりを見せた砂漠の修道士の出現、ローマ帝国におけるキリスト教共同体の立場の激変に伴う教会共同体内の勢力争いなど、さまざまな要素が複雑に絡みあっているために、これまでの教会史の記述においてはきちんとした記述がなされていない。

オリゲネスが異端とみなされるようになった時期は、ちょうどキリスト教会が迫害される対象から帝国の公的宗教としての責任を担うと

⁴ エウセビオス『教会史』第六巻8,4. Attila Jakab, *Chrétiens d'Alexandrie. Recherche et pauvreté aux premiers temps du christianisme (1er-3e siècles)*, Villeneuve d'Ascq, 1998. 詳しくは小高毅「オリゲネス」, 清水書院, 1992年, 76-82頁参照。

⁵ 出村みや子「初期キリスト教の復活論理解の変遷(1) オリゲネスの復活論におけるパウロの影響」, 『ノートルダム清心女子大学キリスト教文化研究所 年報』第21号, 1999年3月, 1-31頁参照。

いう、ローマ帝国との関係における未曾有の激変期に当たっており、それまで聖書に基づく多様な解釈を許容していたキリスト教会は統一的な組織編成と教理面での一致を迫られていた。そしてそのためには、聖書主義に基づいて多様な解釈を許容する立場の象徴的神学者であったオリゲネス神学⁶の影響の広がりは何としても阻止される必要があり、その過程で中心的な役割を果たしたのが四世紀後半に活躍した反異端論者として有名なサラミスの主教エピファニオスであった。

社会学的視点からオリゲネス論争を考察したエリザベス・クラークは、四世紀のオリゲネス論争について、当時の教会共同体が置かれていた社会的関係、ローマ帝国に拡大していた禁欲主義神学の関心、教会指導者たちの管轄権獲得への野心といった複雑な網の目(ウェブ)の産物であることを示し、この論争が実際にはオリゲネス自身の神学思想に関するものというよりは、「オリゲネスは五世紀の転換期においてキリスト教徒にとって問題となっていた様々な関心に対する一つの暗証 (a code word) としての役割を果たした」ことを示した。クラークは、親オリゲネス派と反オリゲネス派の間で激しく争われたオリゲネスをめぐる数多くの論争は、もはや彼の神学に焦点を当てたものでは全くなく、むしろ「個人的な同盟関係、憎しみ、嫉妬によって引き起こされたものである」ことを、エヴァグリオス、エピファニオス、テオフィロス、ヒエロニムス、シュヌーダ、ルフィヌスの事例を分

⁶ 「古代アレクサンドリアの多文化主義的状況とキリスト教」, 『ヨーロッパ・グローバル化と諸文化圏の変容 研究プロジェクト報告書 Ⅰ』, 東北学院大学オープン・リサーチ・センター, 2007年3月31日, 178-193頁, Jon F. Dechow, 'Origen and Early Christian Pluralism', in Charles Kannengiesser and William L. Petersen, eds., *Origen of Alexandria: His World and His Legacy*, University of Notre Dame Press, 1988, pp. 337-356.

析することによって説得的に示している⁷。

オリゲネス論争の解明には、神学的要因に加えてこうした社会的観点からの考察が不可欠であると考えられる。そこでこの研究では、キリスト教世界で非常に尊敬され、キリスト教の禁欲主義的修道士たちに影響力の強かったオリゲネスを、エピファニオスが実際どのようにして『パナリオン』64において危険な異端者としてリストに加えることができたのかという問題を、彼のオリゲネス像の描きに焦点を当てて考察したい。

2) エピファニオスと反異端論の系譜

エピファニオスの反異端論争におけるテキストの引用は傾向的で、極めて不正確であることはよく知られており、クラフトは『パナリオン』について、「エピファニオスが入手し得るあらゆる資料を無批判に集成して異端史としたものである。実際この著作によって、古代教会の異端史の記述は救いがたく混乱させられた」と述べ、さらに彼が「大胆にも、最もひどい、およそありそうにない報告さえも事実として伝え、いざとなれば、自分自身が証人であるとさえ主張することをばからなかったのみならず、論争によりつくり出された異端者の架空の名称から新しい異端や分派をでっち上げた」と批判している⁸。その一例が、エピファニオスがグノーシス主義者の性的乱行を激しく非難し

⁷ Elizabeth A. Clark, *The Origenist Controversy The Cultural Construction of an Early Christian Debate*, Princeton University Press, 1992, p. 6.

⁸ H. クラフト著 水垣渉・泉治典監修『キリスト教教父事典』教文館、2002年、123-4頁。

のために、恐るべき異端としてのグノーシス像が描かれていったことである⁹。しかしナグ・ハマディ文書の研究の進展と共に、教会史の流れにおいて定着していたグノーシス像と性的放埒を結び付けるような記述が見直されている。大貫隆の研究によれば、これらのグノーシス主義文書を見る限り、むしろ性行と結婚を必要悪として容認するか、あるいは「性欲そのものを悪魔視する過激な禁欲主義の立場」が圧倒的であるという¹⁰。

オリゲネスが異端の祖とされてゆく過程にも当時の禁欲主義の問題が関わっており、オリゲネスの神学思想が禁欲主義的修道士に大きな影響を与えていたために、次第に禁欲主義化の傾向を強める帝国のキリスト教における重要な転換点において、彼に対する評価が論争の焦点となったのである。一連のオリゲネス論争が後世のオリゲネス理解に及ぼした影響は、多数の著作が喪失されたことを含めて計り知れないものがある。エピファニオスはキリスト教世界で非常に尊敬され、キリスト教の禁欲主義的修道士たちに影響力の強かったオリゲネスを『パナリオン』64において、どのようにして危険な異端者としてリストに加えることができたのか。この困難な問題を解明するに当たり、彼が従来の反異端論の手法を継承しつつも、そこにどのように新たな要素を加えているかに着目することが重要である。

教会史における反異端論の系譜を概観すれば¹¹、反異端論の最初の

⁹ *The Panarion of Epiphanius of Salamis, Book I (Sects 1-46)*, translated by Frank Williams, E.J. Brill, 1987, p. XXI 参照。

¹⁰ 大貫隆『グノーシス考』岩波書店、2000年、2頁。

¹¹ この点について詳しくは、出村みや子「古代教父のグノーシス像」、大貫隆・島園進・高橋義人・村上陽一郎編『グノーシス 陰の精神史』岩波書店、2001年、189-199頁、同「初期キリスト教とグノーシス主義諸派の関係をめぐって——オリ

証言とされるのが、165年頃ローマで死去した殉教者ユスティノスの『シュンタグマ』であるが、これは失われて現存しない。リヨンの司教エイレナイオス(130-200年頃)は、教会の反グノーシス主義論争として現存する最古の、特に重要な著書の著者である。彼の著書『偽称グノーシスの正体暴露とその反駁』(略称『異端反駁』)は最も包括的で有力な論駁書であり、これは二世紀後半の成立と考えられている。彼が第一巻の冒頭で、「作り話」や空しい系図といった策略を用いて、単純な人々の心を惑わせる狂気と表現したグノーシス像が及ぼした影響は絶大であり、後代の反異端論伝承はすべて彼の影響下にあると言っても過言ではない。彼らは反異端論者たちによって正統的教会とは系譜を異にする、教会にとって危険な外部の異端者として攻撃されている。

そうした反異端論的記述が頂点に達すると同時にその転換点を画するのが、エピファニオスの『葉籠(パナリオン)』である¹²。ここでは20のキリスト教以前の異端(異教の哲学諸派とユダヤ教の諸分派)と、60のキリスト教的異端が論駁の対象となっているが、その中にはグノーシス主義のようなキリスト教会と対立関係にあった外部集団のみならず、ニカイア公会議の正統的信仰の基準から逸脱していると思われる教会内の著名な神学者たちの名もリストに挙げられている¹³。『パ

ゲネスの聖書解釈を中心として』、『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第26号、56-75頁を参照。

¹² テキストは、*Epiphanius II, Panarion haer. 31-61*, herausgegeben von Karl Holl, Berlin: Akademie-Verlag, 1980を用いた。なお英訳版 *The Panarion of Epiphanius of Salamis, Book II and III (Sects 47-80, De Fide)*, translated by Frank Williams, E.J. Brill, 1994が *Nag Hammadi and Manichaean Studies* のシリーズとして出ている。

¹³ John Anthony McGuckin (ed.), *Westminster Handbook to Patristic Theol-*

ナリオン』63では「オリゲネス主義者」が、続く64ではオリゲネス自身とその教説が異端論駁の対象とされている。表題のパナリオンとは薬箱を意味するが、ここには、すべての異端者たちは犖猛かつ有害な野獣（とりわけ蛇）であり、その毒牙によって信仰の消浄さが損なわれているゆえに、彼らに対抗するための解毒剤として薬箱を提供するという意図が込められている。

ここでエピファニオスの反異端論の特徴を見れば、その第一は、Pourkierが指摘するように、エピファニウスが異端の始祖をもつばら強調したことである¹⁴。ピーター・ブラウンが「聖人伝の時代」¹⁵と呼んだ古代末期は、また数々の神学論争によって多数の異端者が生み出された時代であり、つまり聖人伝の時代はまた、反異端論の時代となったのである。エピファニオスが論争においてありありと、蛇や薬、悪霊、異端の始祖たちの墮落した姿を描いたことは、この時代において無学の修道士たちをも視野に入れたキリスト教教育において、イメージの使用がいかに重要だったかを物語るものである。聖人の持つ霊的力を否定的に描いたものが、異端の始祖の中に投影された。『パナリオン』に列挙された異端者はもはや、彼に先立つ反異端論者たちが論駁の対象としたように正統的教会とは対立関係にあった人々、特にグノーシス主義者と呼ばれ、彼らに固有の救済神話を解釈原理として聖書を自在に解釈しつつ、数多くの聖文書を生み出していったセクト的

ogy, p. 119. 参照。

¹⁴ A. Pourkier, *L'hérésologie chez Épiphanes de Salamine*, Paris, 1992, p. 23, 487-488.

¹⁵ ピーター・ブラウン「古代末期の形成」(足立広明訳)慶応義塾大学出版会, 2006年, 47頁。

集団ではなかった。彼はこれらのリストに、オリゲネスやアポリナリオスを初めとする、教会内でかつて尊敬されていた教師たちの墮落の物語を加えたのである。

第二の特徴は、それに伴いエピファニオスが「異端」の定義を変容させたことであり、彼にとって「異端」が意味したものは何かを問う必要がある。教会内の指導者をも痛烈に批判して異端者のリストに加えたエピファニオスにこのような反異端論の執筆を促した直接の契機となったのが、370年代のアポリナリオス派との論争であった¹⁶。エピファニオスが376年の後半にオリゲネスに関する章を書いていた時、彼は同時にアンティオキアで正統派の主教の継承に関する交渉に従事しており、アポリナリオス派との論争の解決に当たっていた。アポリナリオスは異教文化の復興に反対し、ニカイア公会議においては共に正統主義を擁護した仲間であり、アタナシオスの友人でもあったが、その彼がその後「部分的には後の単性論にも見られる命題に立脚し、キリストの人間の本性を制限するという仕方です」¹⁷キリストにおける神性と人性の結合の問題を解決しようと試みるようになった。アポリナリオス主義は362年以降の教会会議でたびたび異端判決を受け、381年にコンスタンティノポリスで開催された第2回公会議において決定的に断罪された。アポリナリオスをめぐる教義的問題は、何年間もエピファニオスを悩ませることになった。Lymanは、以前にニカイア公

¹⁶ アポリナリオス派との論争について詳しくは、Jon F. Dechow, *Dogma and Mysticism*, pp. 60-84, J. Rebecca Lyman, 'The Making of a Heretic: The Life of Origen in Epiphanius *Panarion* 64', *Studia Patristica* 31, 1997, pp. 445-451を参照。

¹⁷ クラフト前掲書, 49頁。

会議を擁護した際のアポリナリオスの輝かしい教えについて知っていただけに、エピファニオスにとっては、この論争は特に苦痛に満ちたものであっただろうと推測している¹⁸。エピファニオスは374年に正統的信仰の教説を叙述した『鎖でつながれた人 (*Ancoratus*)』の中ではオリゲネスとアポリナリオスの弟子たちを結び付けたが、『パナリオン』において彼はオリゲネスとアポリナリオスを共に、すべての異端者の中で最も重要な者として断罪することになった。

Lymanは、エピファニオスが『パナリオン』における異端者を記述するに際して、彼らを蛇や獣として分類する自然史のイメージを体系的に活用することで、反異端論に新たな要素を導入したことを指摘する。彼は『パナリオン』の序文で、蛇の種類を特定した上でその処方薬を記した自然学者たちの入門書を引用しており、彼はこの反異端論駁を医術や自然学の入門書の方法に則って構成することにより、教会にとって有害な教師像を体系的に分類するとともに、「薬効としての新たな正統派のビジョン」を提供したのである¹⁹。その際に彼が、当時の砂漠の無学な禁欲主義グループにも理解しやすい「教会的コイナー」を用いていることは、禁欲主義が広まっていたローマ世界にその影響力を浸透させることに非常に役立った²⁰。

第三の特徴は、彼がオリゲネスの異端的イメージを描く際に、伝記的要素を導入していることである。従来の研究者たちはエピファニオ

¹⁸ J. Rebecca Lyman, 'The Making of a Heretic', pp. 446-447.

¹⁹ J. Rebecca Lyman, 'Origen as Ascetic Theologian: Orthodoxy and Authority in the fourth-century church', *Origeniana Septima*, Leuven, 1999, pp. 189-190.

²⁰ A. Pourkier, *L'hérésiologie chez Épiphanes de Salamine*, pp. 486-488.

スがここに採用した資料の信憑性を疑い、「低俗なエピソード (vulgar episode)」²¹ や「混乱したゴシップ (confused gossip)」²² として片付けている。しかし Lyman²³ は、エピファニオスが『パナリオン』64 のテキストにおいてオリゲネスを異端者として描くに際して、こうした低俗な伝記的記述から始めていることに着目し、それが後続のオリゲネスの神学的思想の問題に関する叙述以上に読者に与えた文学的效果について示唆に富む考察を行っている。この点に着目しつつ、『パナリオン』64 のテキストを考察したい。

3) エピファニオスによる「異端者」像の描きの問題

オリゲネスを異端者として断罪した『パナリオン』64 の構成を概観すれば、初めにオリゲネスに関する伝記的記述が置かれている。エピファニオスは最初にオリゲネスのアレクサンドリア時代の名誉ある生い立ちと神学活動、迫害による苦難について簡潔に述べ(1, 1-3 この部分はエウセビオスの『教会史』の記述と部分的に重なっているものの、時代記述が誤っている)、次に歴史的信憑性の乏しい三つのエピソード(1, 4-2, 6) を挿入した後、彼がパレスチナに活動の拠点を移すきっかけと、その後の神学活動の深刻な影響について記述している(2, 7-4, 2

²¹ Dechow, *Dogma and Mysticism*, p. 136.

²² H. Crouzel, *Origen*, New York, 1989, p. 36. 従来のオリゲネス研究者たちがこの話の信憑性を否定してきたことについて、H. Crouzel and H. DeLubac, *Exegese medieval I*, Paris, 1959, pp. 257-260 参照。

²³ J. Rebecca Lyman, 'The Making of a Heretic', pp. 447-449. なお英訳版(脚注 12) では、エピファニオスはオリゲネスに敵対的な記述をするに際してエウセビオスに依拠せず、それ自体はエウセビオスの影響を受けた口伝を用いていると推測している (p. 131 脚注 1)。

この部分もオリゲネスの神学活動の実態を全く無視している)。エピファニオスはそれらの記述を終えた後に、オリゲネスの神学思想の問題に関する批判に移っているのである。

オリゲネスの伝記的記述部分に見られる著しい特徴として、歴史記述上の明らかな誤りが認められることと、信憑性の乏しい言い伝えが導入されていることが挙げられる。エピファニオスはそれらを用いてそれまで人々の間で名声を得ていたオリゲネスの英雄的イメージと、痛烈な批判とを交錯させつつ記述しており、これが本書に新たな異端者のイメージの描きを導入したエピファニオスの叙述の手法となっている。その意図はどこにあったのだろうか。

〔パナリオン〕64の序論部分でエピファニウスは、オリゲネスが聖なる殉教者の息子で、十分な教養を身につけて教会内で育ち、広範な学識で知られ、異教徒による迫害に屈しなかったことを告げており、この部分は一見オリゲネスの神学的遺産の継承者であったエウセビオス(260/265-338/339年)の『教会史』の記述と部分的に重なっているように見えるものの、以下に示すように時代的記述に明らかな誤りがある。

「彼は、神聖にして祝福された殉教者レオニダスの息子であり、彼自身も若き日に非常な迫害を受けた (καὶ αὐτὸς δὲ τὰ πλεῖστα διωχθεὶς ἐν τῇ νέᾳ αὐτοῦ ἡλικίᾳ)。彼はギリシア人たちの教養に従って学び、教会内で育ち、デキウス帝の時代に (ἐν χρόνοις Δεκίου τοῦ βασιλέως) アレクサンドリアで著名な者となった。彼は生まれにおいてエジプト人であるが、アレクサンドリアに住んで成長し、恐らくは一時期アテネの学校に行ったこともあったようだ。彼は信仰の聖なるみ言葉とキリストのみ名のために多くの苦難を受けたが、それはこの都市内をし

ばしば引き回されたり、侮辱されたり、耐えがたい拷問に渡されたりしたものであったと言われている (λέγεται) 」。]

エピファニオスは、本書のこれに先立つ箇所描かれたもつと初期の異端の始祖たちとは驚くほど対比的に、オリゲネスをあたかも聖なる殉教者のように寛大に扱っているように見える。この導入部ではオリゲネスは彼の反異端論の通常の語彙に見られるような蛇でもなければ誘惑者、雑草、毒、悪霊に取りつかれた者、高慢な者、争論好きとして描かれてはいない。さらに彼はオリゲネスを、「パナリオン」63で論じた、いわゆるオリゲネス主義者と称される砂漠の奇妙なグループとは区別している。しかしオリゲネスの生涯に関する年代記述に大きな誤りがあり、エウセビオスはオリゲネスが既に十代の頃にアレクサンドリアで彼のキャリアを開始した時期を、セプティミス・セウエルス帝の治世（在位 193-211 年）の 209 年としている（『教会史』第六巻 1-2 章）。また彼が激しい迫害を受けた時期についても、このセウエルス帝の母ユリア・ママエアがオリゲネスの称賛者であったために（『教会史』第六巻 21 章、3-4）、アレクサンドリア時代にキリスト教徒に加えられた迫害ではオリゲネス自身は迫害に会うことなく、殉教した彼の弟子たちに最後まで付き添って励ましたと述べられている（『教会史』第六巻 4-5 章）。他方オリゲネス自身が迫害による拷問を受けたのは、彼の晩年の時期に当たるデキウス帝（在位 249-51 年）の治下であり、この時の拷問がもつて死去したと伝えられている。

従ってエピファニオスは、オリゲネスが晩年にカイサレリアの迫害で拷問を受けた出来事を、若き頃の出来事に移し変えて、後続の根拠の乏しい三つの話と強引に結びつけようとしたと思われる。これらは

オリゲネスがアレクサンドリアで受けた迫害の故に背教的行為を行ったという内容の話であり、デショウはこれらの三つの話が「非常に疑わしいものなので、それらは民間伝承の領域に押しやられるべきである」²⁴と述べており、エピファニオス自身もこれらの話が単なる伝聞にすぎないことを認めている。

その第一は、アレクサンドリアの守護神セラピスを祀る神殿のセラペイオンを舞台とした次のような話である。

「言い伝えによれば (ὡς λόγος), ある時, 異教徒らが彼の髪を剃り, 彼らがセラペイオンと呼ぶ彼らの偶像の神殿の階段に彼を座らせ, 異教に拝礼するおぞましい行為のために階段を上る人々にヤシの枝を手渡すように命じた。というのも偶像に仕える彼らの祭司たちはこうした動作をしていたからである。だが彼は [枝を] 取り, 恐れも躊躇いもなく, 大声で大胆な確信をもって, 「来て, 取るがよい。偶像の枝ではなく, キリストの枝を」と叫んだ。さらに, 古代の人々が言い伝えに従って (κατὰ παράδοσιν), 彼についてその勇敢な行為を伝えてい

る話は数多く存在している」(1, 4-5)。

このエピソードは、それに先立つ記述(「彼は信仰の聖なるみ言葉とキリストのみ名のために多くの苦難を受けた」)の実例として導入されているが、エピファニオスは次のような注釈を加えている。

「だが彼のこれらの称賛に値する行為は最後まで維持されなかった。というのも彼はその学識と受けた教育の非常な卓越性のために著しい嫉妬による中傷的的となり, むしろこれが彼の時代の権威ある指導的立場の者たちを挑発することとなったのだから」(2, 1)。

²⁴ Dechow, *Dogma and Mysticism*, pp. 135-136.

続いてエピファニオスは第二の話を簡単に紹介している。

「すなわち悪の実行者たちが悪魔的な謀略によって、彼に対して最も恥ずべき行為を加え、そのようにして彼を罰しようと企てて、彼の身体を虐待するためにエチオピア人を用意しておいた。だがオリゲネスは悪魔的な仕業による観念に耐えることができず、遂に口を開き、いずれかを選択せねばならないのであれば、むしろ犠牲を捧げることを選ぶと言った。広く伝えられているように、彼はこれを自発的意図によって (ἐκούσῖα γνώμη) 行ったのではなかった。しかし彼はともかくこれをすることに同意したのであり、彼の両手には香が積まれ、それを祭壇の火の中に投げ入れたのだった」(2, 2-3)。

この話も歴史的出来事とは考え難いので、研究者はこの話の由来について、エウセビオスが伝えている、アレクサンドリアにおけるオリゲネスの女性の弟子ポタミアエナの有名な殉教の記述の異説として広まっていたのではないかと推測している(『教会史』第六巻5章)²⁵。

このエピソードについてもエピファニオスは、「こうして彼はこの時、審判者なる聖証者たちや殉教者たちによって殉教者から排除され、教会からも追放されたのだった」と注釈を加えて、これによって彼がアレクサンドリアを退去してパレスチナに活動の拠点を移さざるを得なくなったと述べているが、アレクサンドリア退去の問題については当時のアレクサンドリア教会内部の複雑な問題が関わっており²⁶、いずれにしてもこの記述も次の第三の話とも関連して、とても資料的に

²⁵ *The Panarion of Epiphanius of Salamis, Book II and III*, p. 132 の脚注 9 参照。ポタミアエナの殉教の際に、「アキュラスという裁判官は彼女の全身に残酷な拷問を加えた後、最後には、彼女を剣闘士に引き渡して弄ばさせる、と彼女を脅した」。しかし彼女はこれを拒絶して、殉教の死を遂げたと伝えられている。

²⁶ 前述の脚注 4 参照。

裏付けることのできない想定である。

第三の話は、オリゲネスがアレクサンドリアを退去してエルサレムに到着した際に、彼が「聖書解釈における卓越性と高い教養を身につけた人物だったゆえに」、教会で話してくれるようにと司祭たちに依頼された際の出来事として語られている。司祭たちが強く依頼したので「彼は立ち上がり、ただ詩編 49 篇のうちからこの節を、その他のすべての節を省いたまま、朗読した。「神は背く者に言う。[なぜあなたは私の戒めを説き、あなたの口に私の契約を受けるのか!]>と。そして彼は聖書の巻物を巻き取るとそれを返し、激しく泣きながら席に着くと、皆も彼と共に泣いた」(2, 7-8) というものである。

この話についてエピファニオスは注釈を付けずに紹介し、三つの話がここで終わっている。第三の話も資料的裏付けのないもので、彼がアレクサンドリアを退去する以前にカイサレイアの聖堂で説教を依頼された出来事が、ここではアレクサンドリア退去直後の出来事とされ、エピファニオスは退去先をカイサレイアからエルサレムに移した上、これに先立つ物語に暗示された背教行為をオリゲネスがあたかも悔いていたかのような話に仕立て上げている。

このようにしてエピファニオスは、教会内で尊敬され「聖書解釈における卓越性と高い教養を身につけた」オリゲネスの教師像を、一挙に異端者のイメージに塗り変えてしまったのである。Lyman は「この話の真偽はともかく、それらは禁欲的聴衆のために効果的に用いられ、構築されている」と述べ、それを二つの点から指摘している。それはまず「彼の背教が不本意な質のものだったこと」²⁷で、ここでは不本意

²⁷ J. Rebecca Lyman, 'The Making of a Heretic', p. 449.

ながらも背教者となったオリゲネス像が描かれていることである。それは四世紀における新たな異端の実例を提示することになった。「以前のユスティノスやエイレナイオスの修辞学的モデルとは違い、異端者は外部の者としては描かれていない。これらの話の中でオリゲネスの異端は明らかに哲学に由来するものでもなければ、彼は真に教会に帰属してはいない異質な背教者でもなければ、悪しき教師に従ったのでもない。オリゲネスの異端は、深い教養と禁欲を身につけた教会人が、他者の必要によって強制され、彼自身の賜物を制御できないという、もっと戦慄すべき内的過ちなのである」²⁸。

Lyman が第二に指摘しているのは、彼が他者の必要によって語るように強いられ、強制されて、背教したとみなされていることである²⁹。エピファニオスはオリゲネスの描きにおいて、初めは聖なる殉教者としての生い立ちや学識、迫害の最中に示した勇敢な振る舞いを称賛しているように見えるものの、一貫してそれらを両義的に用いていることに注目しなければならない。デショウは、少なくとも第一と第三の話については必ずしもオリゲネスに好意的でない訳ではなく、第二の背教の話の基礎固めとしての役割を果たしているとみなしているが³⁰、オリゲネスの英雄的行為として伝えられていた振る舞いそれ自体が、エピファニオスの時代の禁欲主義者のモデルには適合しないことを彼は十分に意識していたと考えられる。オリゲネスはまさにその学識のゆえに、他者によって語ることや教えることを強いられ、つい

²⁸ J. Rebecca Lyman, 'The Making of a Heretic', pp. 450-51.

²⁹ J. Rebecca Lyman, 'The Making of a Heretic', p. 449.

³⁰ Dechow, *Dogma and Mysticism*, p. 135.

には大胆に語ることになるが、それが彼を罪に導いてしまった。それゆえエピファニオスはこれらの話を通じて、オリゲネスの学識と輝かしさは、彼を罪に導く危険と紙一重であることを示し、無学と沈黙こそが救いへの道であることを同時代の禁欲主義的修道士たちに伝えようとしたのである。

結 論

これらの記述を根拠のない伝聞として片付けてしまうのは簡単であるが、禁欲主義と殉教者崇敬の隆盛を見た四世紀の教会において、エピファニオスがオリゲネスの権威を失墜させるために、悪意に満ちた構成を行っていることは明瞭である。エピファニオスがこの時代の多くの教養ある神学者たちとは違い、世俗的教養や哲学に敵対的であったことはよく知られている。Lyman は「彼はオリゲネスの思弁のない哲学的関心をはっきりと断罪する必要はない。彼はただ禁欲主義者たちの教育にとって危険な点を強調する話を語るだけでよいのだ」³¹と述べて、これらの箇所を、明らかに尊敬され、英雄的な教師に対して、エピファニウスが巧妙な論争を開始していると見ることができると結論付けている。

オリゲネスの生涯とその思想的遺産がこのような形で、その後長い間異端とみなされるに至ったことは教会史における非常に不幸な出来事であったが、他方でエウセビオスの教会史の記述や、大バシレイオスとナジアンゾスのグレゴリオスが共同で編集したオリゲネスの著作

³¹ J. Rebecca Lyman, 'The Making of a Heretic', p. 449.

からの選書集『フィロカリア』が、彼のテキスト伝承と共に後代に伝えられ、そのような偽証に対して静かに反論していることも忘れてはならない。現代の研究者たちの地道なテキストへの取り組みによって、オリゲネスがその後の聖書解釈の歴史にどれほど貢献してきたかが明らかにされると共に、オリゲネスをめぐる後世の教会政治上の複雑な論争の実態も徐々に解明されているのである。